

月刊

書字文化

～日本書字文化協会機関紙 No53～

平成 30 年

2 月号

一般社団法人日本書字文化協会機関紙

編集長 渡邊啓子

一般社団法人日本書字文化協会

代表理事・会長 大平恵理

〒164-0001 中野区中野 2-11-6 丸由ビル 301

電話 03 - 6304 - 8212 FAX03 - 6304 - 8213

E メール info@syobunkyo.org



目次

第 6 回伝統文化大会特集

ネット展示を充実

審査講評

加藤東陽

コラム「こころ」

大平恵理

東・西・南・北

鮫島里香

第 3 回臨書展案内

第6回伝統文化大会の年賀コン、書き初め展覧会

大会作品ネット展示を充実

第6回伝統文化大会から、これまでの表彰式併設の作品展示会にかえてネット上の作品掲示を充実させることとしました。出品者が全国に広がる中で、バリアフリーの良さを取り入れるものです。一方、実物を見ることの良さと、大会出品者の交流を促す「優秀作品展示・交流会」を東京以外でも開催する方針です。

このため「審査結果」発表ページを新設し、書文協ホームページとリンクします。審査結果発表ページでは、特別賞全部と優秀特選全部の受賞者氏名を掲載します。その上で大きく変わるのは作品の写真です。

教育特別奨励賞を除く特別賞作品の写真を掲載。それらはA4サイズに拡大でき、印刷も可能です（次ページ参照）。大会名、賞名・氏名等が記載されていますので受賞記念や資料に利用してください。スマホ画面にも入り切るように対応して作られますので、友人とスマホを見ながら話し合うこともできます。

新しい審査結果ページは2月16日ごろ書文協ホームページにリンクしてアップ予定です。

こうしたことから、従来型の表彰式・展示は今回は行いませんが、セレモニー形式として身に付けてもらうため、また席書披露の場とする意味からも3回に1回のペースで表彰式を開催します。次回は第8回(2020年春)の予定です。

応募総点数が11%増

第6回全国書写書道伝統文化大会は1月19日閉め切られ、同月25日に審査会が開かれました（審査講評は次ページ。月刊書字文化ウェブ版は審査結果ページをご覧ください）。今回は例年以上に事前告知に力を入れた結果、全国年賀はがきコンクール、学生書き初め展覧会ともに前回より募集数が増え、全体では1.11倍となりました。

応募点数は全国年賀はがきコンクール11484点（第5回10440点）、学生書き初め展覧会1443点（同1203点）。総計12927点（同11643点）でした。

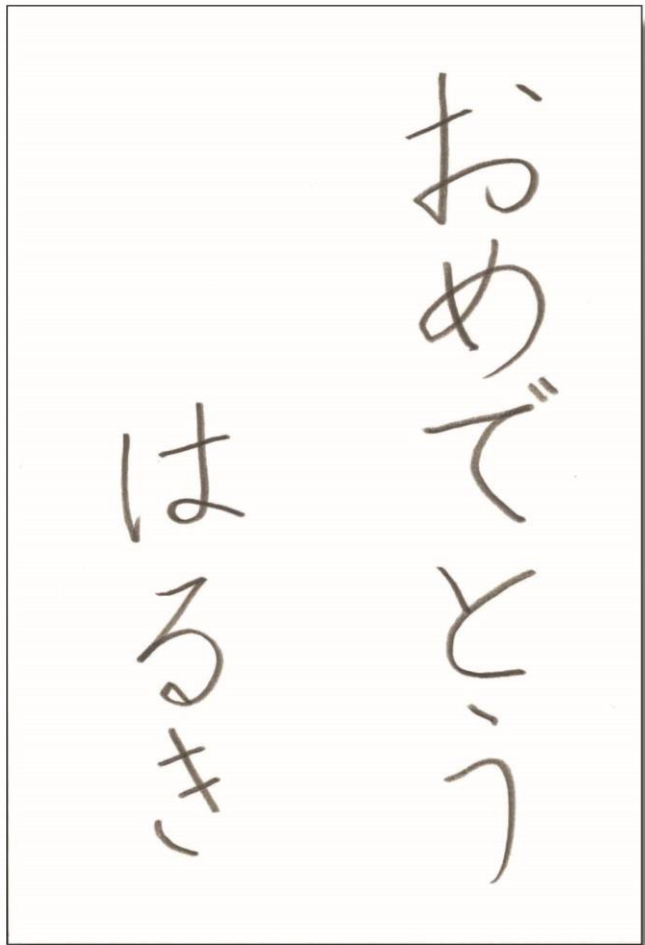
第6回全国書写書道伝統文化大会

平成29年度全国年賀はがきコンクール

文部科学大臣賞

千葉県・たきのい幼稚園

年長 幸保 陽己



主催 一般社団法人 日本書字文化協会
公益財団法人 文字・活字文化推進機構

後援 文部科学省ほか

第6回全国書写書道伝統文化大会

平成29年度全国学生書き初め展覧会

中央審査委員会賞

岡山県・明誠学院高等学校

2年 難波 智尋



主催 一般社団法人 日本書字文化協会

公益財団法人 文字・活字文化推進機構

後援 文部科学省ほか

第6回全国書写書道伝統文化大会審査講評

中央審査委員会委員長 加藤 東陽

「書写書道に追い風」



第6回伝統文化大会の中央審査会は平成30年1月25日、東京都中野区の区立もみじ山文化センターで開かれました。審査会には辻眞智子副委員長ら中央審査委員会委員5人と日本書字文化協会から大平恵理会長ら3人が加わりました。

冒頭、大会事務局から「応募点数が前回の11%増となり、明らかに増加傾向に転じた。書写書道には今、世間の追い風が吹いていると分析したい」との報告がありました。

応募点数は全国年賀はがきコンクール11484点（第5回10440点）、学生書き初め展覧会1443点（同1203点）。総計12927点（同11643点）で1.11倍の伸びです。

作品のバランスに気を付けよう

審査会は「良い所を見つけましょう」という合言葉でスタートしました。皆さん、一生懸命取り組んでいる姿が伝わってくる作品ばかりでした。「これはずいぶん筆が動いているねえ」と審査員を感嘆させる作品もありました。しかし、厳格公正を旨とする審査ですから、講評は注意点を並べ立てることになります。大きくは「作品のバランスに気を配って」と言いたいと思います。

作品のバランスを保つうえで気になった一つが名前の書き方です。左側に上から下までを使って名前を書いている作品は、見ても不自然です。名前は本文の天地より中に、中央に寄せて書くのが良いでしょう。名前の書き方で大臣賞が左右されるケースもありました。

正しい筆順で書くことも文字や作品のバランスを取るうえで大事です。例えば、年賀はがきの日付にある平成の「成」は、一画目を縦線から入るのです。そうしたうえで横にひかないと字がつぶれてしまいます。一方、筆順は行書になると変化することもあることをしっかり認識しましょう。

謹賀新年の4文字列は曲がってバランスを取りづらいので注意しましょう。「で」や「が」などの濁点の位置にも気を付けましょう。硬筆も含め落款印を押した作品がありましたが、印の大きさや押す位置にも留意したいと思います。

この他、中学生以上になったら、行書体の崩し方に注意してほしいと思いました。例えば、右払いの終筆も楷書とは異なってきます。草書になるとますます字形は変化してきますが「この人は実画をちゃんと分かって書いているのだろうか」と疑問に思う作品もありました。

次回もたくさんの力作を期待して講評といたします。

い

い

ろ

大平 恵理(書文協会長)

コンクールで何を学ぶか



第6回伝統文化大会の処理に追われています。まず1万4千点もの作品を中央審査会にかける2%ほどに絞りこみます。中央審査委員会の先生方が決定した上位特別賞に続いて、審査経過に沿いながら特選、金・銀・銅賞の本賞まで書文協審査会で決めます。その審査結果に基づいて賞状・副賞を用意するのです。ホームページへの結果掲載準備も含め、2か月ほどは文字通り目が回る忙しさです。

団体審査（一審）は尊重しますが、書文協本部の判断とかけ離れる場合は、団体指導者に事情を聞きます。一番難しいのは“態度点”です。「あんな態度の悪い生徒の作品を上にはあげられません」と指導者。作品なら書きぶりについて論議はできますが、生徒の態度となると議論はしにくくなります。この辺のことは以前に一度書いたことがあるかと思えますし、今回はスルーさせていただくとしても、書文協として団体の指導者に指導基準として何を伝えるかは、コンクールを実施する意義の面でとても大事なことだと思います。

書文協は“賞取り競争”のためにコンクールをやっているのではありません。書の学びの一里塚として自分の足跡を振り返る機会とし、結果が出たらオフサイド、結果にこだわらず前に進むことを理念としています。しかし、現実には親子ともども賞結果に一喜一憂してしまいがちです。

上記の理念に付け加えて言えば、書く技術に見合った精神力を身に付けて欲しいと思います。精神力の中身は何かというと、継続する力を身に付けることです。これは初心者からそこそこ書けるようになったころに大事なことです。賞結果にこだわらず、書の学びを続けていくのは、なかなか精神力のいることなのです。上手に書けることの喜び、楽しさを普段の練習でどこまで分かってもらえる指導をするか、が決めてなのでしょう。

つまり、書写書道の楽しさをいかに伝えるかの指導法開発に書文協はもっと取り組まなくていけない、ということなのですね。

第3回書文協臨書展

臨書に親しもう 3/26締切り

臨書は書を深く学ぼうとする人には必須のものと言って良いでしょう。日本寒山寺が建つ青梅市沢井の多摩川上流をこの臨書展のシンボリックな場所としたのは、この臨書の世界に体全体で浸っていただきたいからです。姑蘇城外の寒山寺から打ち出した鐘の音が、旅愁の船に流れてくる情景がここで追体験されるでしょう。漢詩を書いた碑も本場の寒山寺と同じ姿でここにあります。

臨書は、カリキュラム的には高校授業のものですが、小・中学生のうちから親しめればと思います。「臨書の部」の常設課題とした漢詩「楓橋夜泊」は28文字のうち、現在日本で使われていない漢字は1つありません。書文協ではこの内日本の教育漢字にある10文字について楷書手本を用意した「楷書筆写の部」を置いています。

皆さん、奮って応募してください。



実施要項（抜粋）

実施要項全文は第3回書文協実施要項は書文協ホームページ

http://www.syobunkyo.org/freepage_124_1.htm

にあります。1ページの中ほどにある横タスクバーの右から2番目「大会」にカーソルを当てると、隠れていた各項目が縦に表示（スクロール）されます。

その中の「臨書会」をクリックすると実施要項全文が掲載されています。

作品募集	平成30年3月1日～3月26日（月）必着
応募資格	全部門とも年齢不問
部門	臨書の部、楷書筆写の部、常設課題の部
出品料	臨書の部は1点1000円（幼児・小中学生は700円） 楷書筆写の部同700円（幼児・小中学生は500円）
審査	加藤東陽（書文協中央審査委員会委員長） 加藤泰弘（同委員、東京学芸大教授、文科省教科調査官） 大平恵理（書文協会長）
審査結果発表	同4月末日、書文協機関誌5月号、ホームページ
優秀作品展	同5月23日（水）～27日（日）、澤乃井ガーデンギャラリー

東・西・南・北

鮫島 里香

鮫島世玲菜・麻里菜の母、東京都在住

褒められる機会の大切さ

極寒の冬、子供達の手もかじかむ日々ですが、娘達は元気一杯、習字の練習にいそしんでいます。年明け1月中旬、世玲菜は「杉並区学校文化栄誉顕彰」の表彰を受けました（写真）。書文協の夏の大会、「第6回全国書写書道総合大会」における「大賞」受賞に対する表彰でした。書文協、杉並区、そして推薦して下さった学校に感謝しています。

中学生になり、多忙さが増してきた娘に対し、母として出来る事は、心からの応援と、体調面と精神面のケアのみです。あとは先生方を信頼し、子供達の成長力を信じ、預ければ大丈夫です。書文協の先生方の熱心なご指導のおかげで子供達は習字に夢中になるのです。先生方が子供達と真摯に向き合い、子供達もまたそこで必死に取り組む光景は、毎回心が熱くなります。「頑張ったね」と自然と言葉がけをしている私です。

大会練習においては、遠方から来るお友達とも一緒に頑張ることで、技術だけでなく、精神的な成長が見られます。努力と成長が結果に結びつき、周囲に褒められることで、親が想像する以上に次回への意欲がわくようです。杉並区教育委員長が「皆さんの自信につなげてほしい。同時に、未来を担う皆さんへの大人からのエールにしたい。沢山褒めてもらってほしい。」と、栄誉顕彰会のあいさつで話しておられ、本当に嬉しく思いました。子育ての中でも「褒めること」は非常に大切だと思っています。

評価され、褒められる機会に多く恵まれることに感謝し、子供達には、今後努力を続けていってほしいと願っています。



（編集部から）書文協では、大会への出品者、特に児童生徒が身の回りで褒められることは大事だと思っています。園・学校、自治体に共催の文字・活字文化推進機構との連名で顕彰依頼を送付しています。顕彰制度は有無を含めばらばらですが、連絡は歓迎されています。今後も充実させていく方針です。